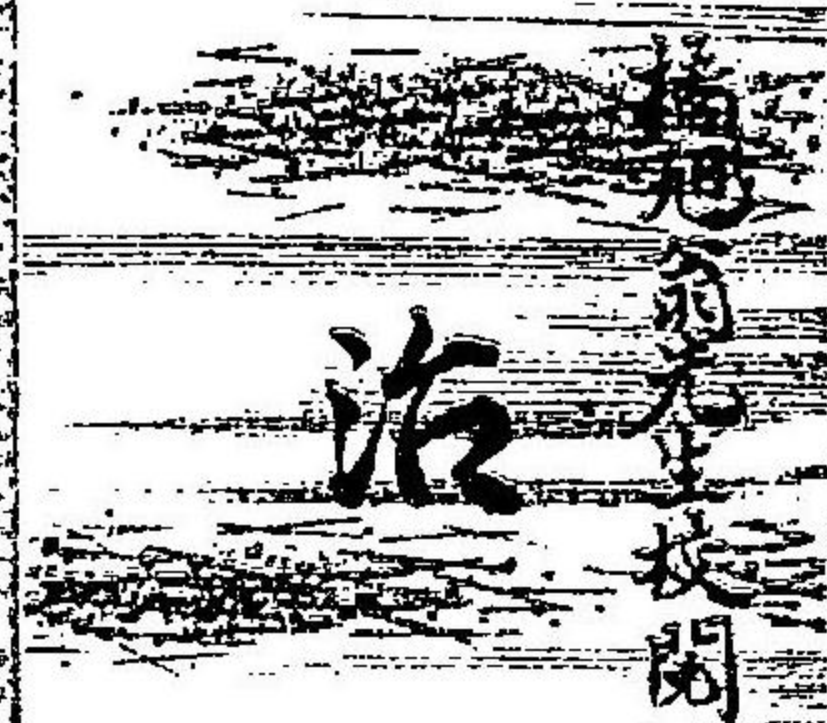
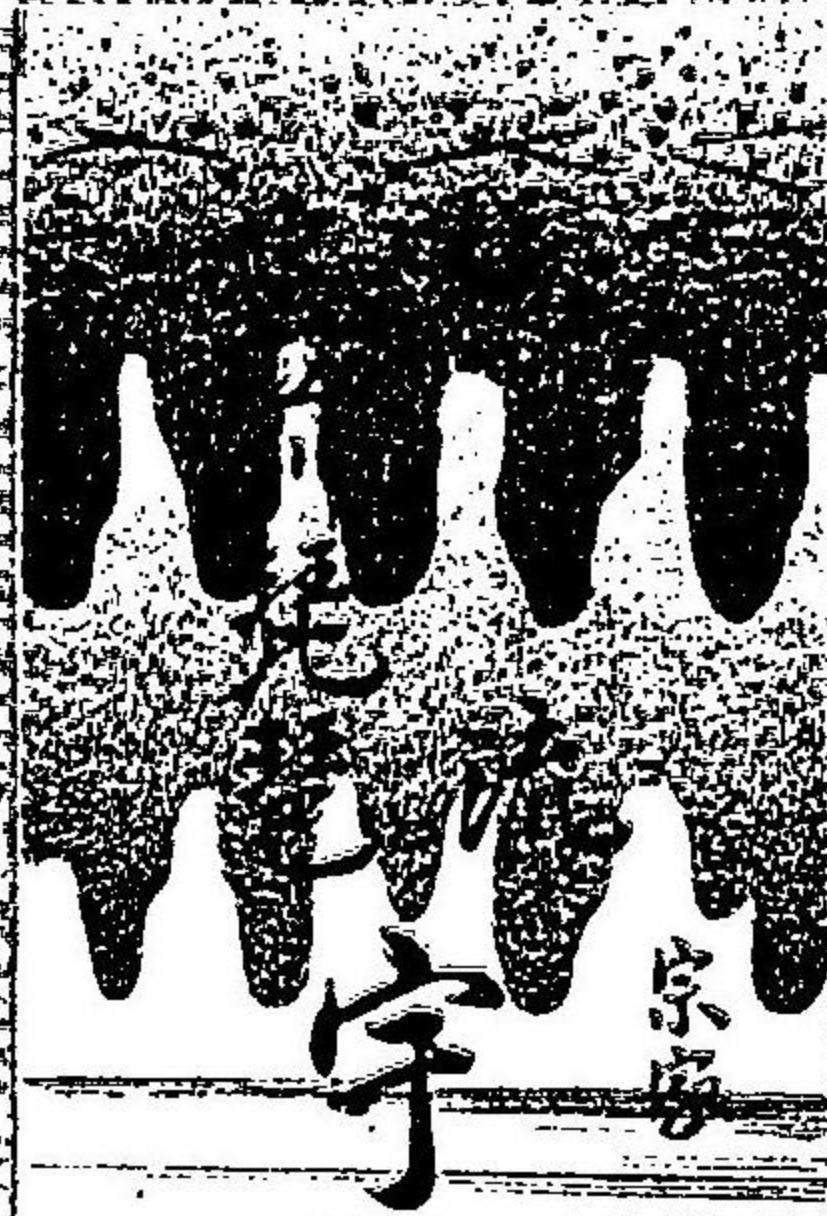


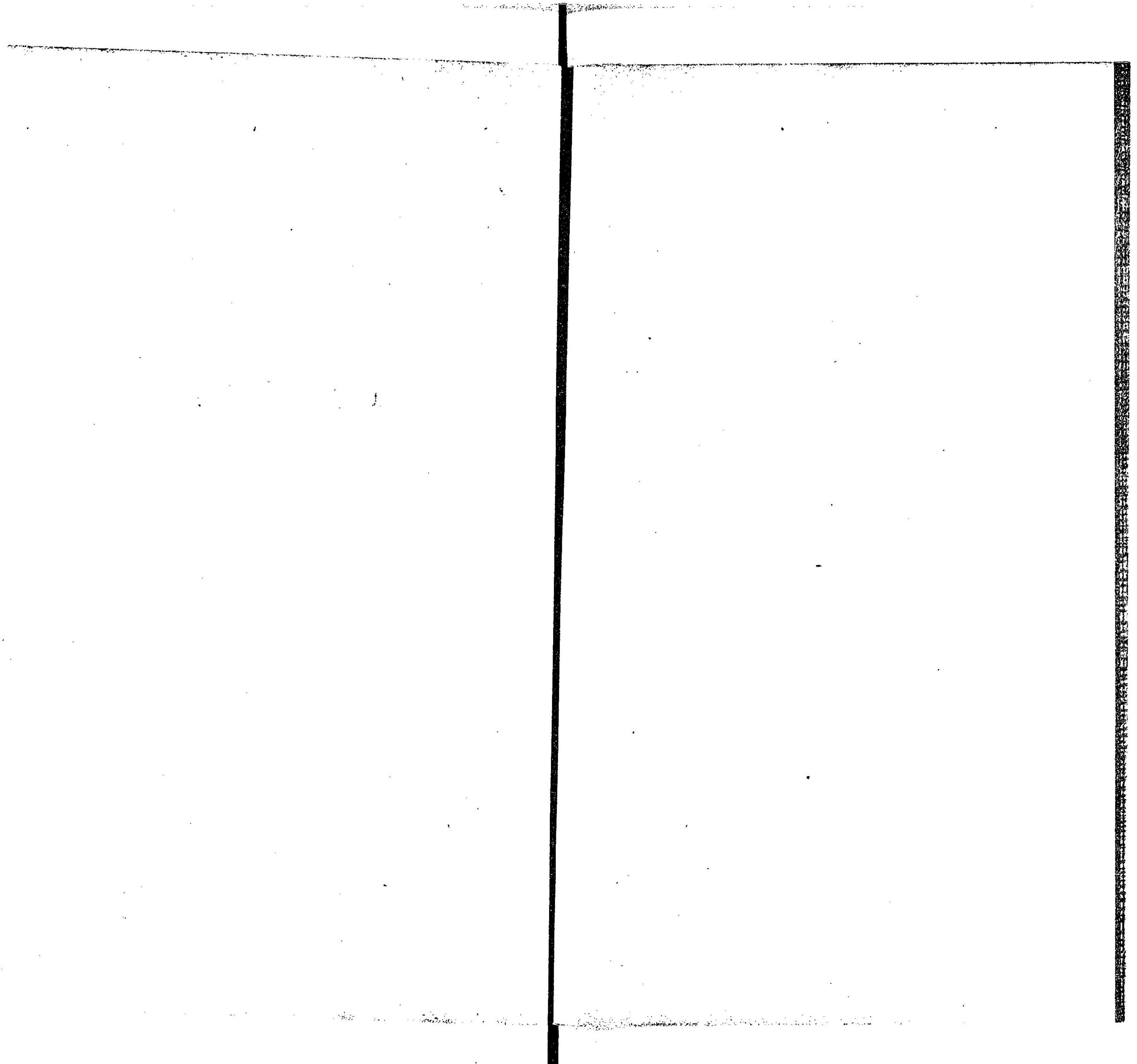
特44

86



265

109



法
中
專
意
緒

博



明治
43. 6. 27
内交

己酉初夏

柳江題



宇治川 下の巻

玉蘭作

去る程に御曹子義經は

貳萬五千餘騎を引率

伊賀路を越へて宇治川の

涯にこそは著き給ひし

折しも睦月の末なれば

比良志賀山の雪こほり

解けて漲るみづうみの

そこぐ激流すままじく

こがましく水は岸を撃ち

音ドウくと鳴り響き

大地ゆらめく許りなり

すぐに敵軍はを引き

大綱を張りさおも木を

つなぎて流し懸ければ

翼なき身のいかに一

渡らぶぐも見送りけり

されど血氣のたぐ曹子

いかに躊躇ひ給ふつ

川はたちかく打出でて

去ぬる治承の合戦に

足利又太郎忠綱は

此川渡りけると聞く

鬼神にてはよもあらど

況て利根北上の急流と

優り劣りは無きぞが

渡りて見よと仰せける

下知に従ひ畠山重忠は

それが瀬踏はらむと

いひも卒らぬ時たまもあれ

平等院ひらびらういんのうらとらに

香かほりも高たかまいたちはなの

小島こじまが崎さきより乗のりこ入れて

前後ぜんご争まじふ猛まう者ぶあるにぞ

あはれ如何いかにと見みてあれば

前まへに打うたせむ若わか武者むしやは

色いろをむ香かほをむ後あとぞ知る

いびらの梅うめの梶かぢ原はらにて

さて續つげむは今いまもかも

咲さきにほふるむ山やま吹ふの

花はな色いろをどこの佐さ々さ木きなり

駒こまは天下てんかの逸い物ぶつにて

騎のり手ても聞きゆる方かた手てだれ故ゆゑ

敵てきも味み方かたも兩りやう岸がんに

鳴なりを鎮しづめて見め詰つめたり

さしもの激げき流りゅう物ぶつ共ともせず

浮うきつ潜ひそりつ競まひ行ゆく

その有あり様さまはさながらに

若わか鮎あゆばらる川かほなみに

鶉を放ちたる如くなり

佐々木は後より聲を掛け

ヤア梶原殿腹帯が延て候ぞ

疾く縮めすは危しと

言れて梶原たどろきて

手綱を馬の結髪に捨て

左右の鐙を踏みずか

腹帯を解きて締め直す

佐々木は其間にツト抜て

真一文字に乗りわたる

對の岸にぞ打上げたり

たくれたりしが残念と

あせれどはやまき氷勢に

たしながされて梶原は

笠簪形にぞわたしける

うたてや人の言の葉に

かまにこぼされて磨墨の

締め腹帯のそれならぞ

ころの細の地びかや

宇治の川霧絶いづくに

あらはれわたる生月の

光とともたさしーのぼる

ほまれもたかき高細の

武者は、代々に耀きけり

武者は今もかざけり

明治四十三年六月十日印刷
全 四十三年六月二十五日發行

編發行兼
編輯人

大阪市東區和泉町二丁目一番地
有 村 彌 四 郎

印刷人

大阪市東區和泉町二丁目一番地
藤 井 護 三 郎
電話東四五九番

發行所兼
印刷所

大阪市東區和泉町二丁目一番地
藤 井 改 進 堂
長電話東二七〇番

265
109

